

## ■ 災害や地震に対する「慣れ」、背景には現代の情報過多が

言うまでもなく日本は地震大国ですが、今回の調査では6割以上の方が「地震に慣れてしまった」と回答しています。その理由の一つとして考えられるのが、TVやインターネットなどによる情報量の多さです。災害に関する情報が次々と飛び込んでくると、最初は緊張感を持ったとしても、だんだん災害情報に慣れてしまいます。特に自分の生活圏ではない遠隔地で起こった災害は、画面の向こう側の出来事となり、自分ごと化できなくなります。「最近地震が多いね」「災害が増えたね」と日常的に話題にしている、具体的な行動に結びつかないことも多いのではないのでしょうか。災害に関する情報が増えるほど、逆に情報に慣れてしまう。そんな「地震慣れ」の実態がうかがえます。

## ■ 意識はあるのに、本当に必要な備えができていない… 陥りがちな「とりあえず防災」

今回の調査結果から「とりあえず防災」というキーワードが導かれていますが、まさにそのとおりです！防災対策をするべきと思っても、具体的に自分が何をすればいいのかわからない人が多い。だから、とりあえず水を備蓄したり、とりあえずいろいろなものが入った防災セットを買ってみたり…心当たりはありませんか？例えば、防災セットに入っている「ろうそく」。停電したときに役に立ちそうですが、地震のときはガス漏れや引火など二次災害の危険もあるので、実はろうそくは使えないことも。防災セットに入っている三角巾も、正しく使える人は少ないのでは。「とりあえず」とそろえてみただけでは、必要・十分な備えにはならないかもしれません。

## ■ 一步進んだ備え方 「地域の災害リスク」と「家族構成」に合わせた防災対策を

では、防災のために、「とりあえず」ではなくどんな対策をすればいいのか？私のお勧めは、地域の災害リスクと家族構成から、何が必要かを洗い出すことです。地域の災害リスクとは、自分が暮らす地域にどんな災害危険があるのかわかることです。例えば防災用品について考えてみます。自治体から出ているハザードマップを見て、自宅周辺が避難が必要なエリアなら、避難先へ持っていく避難用品（軽量でコンパクトなもの）を準備します。逆に、直ちに避難をしなくてよさそうなエリアであれば、自宅でしばらく生活するための備蓄品（食品・生活用品など）をそろえておきましょう。もし液状化リスクが高い地域なら、水道やガスなどのライフラインが遮断されるリスクが高いため、飲料水は多めに、水洗トイレの代わりとなる非常用トイレなども備えておきたいですね。

家族構成によっても、準備するアイテムは変わってきます。例えば女性は生理用品、シニアは老眼鏡や歩行具、子どもは絵本など遊べるものが必要ですね。「とりあえず」ではなく、家族にとって本当に必要なものを平時から考え、備えておくことが肝心です。

## ■ 9月1日は「防災の日」「体験」をきっかけに、「とりあえず防災」から脱却しよう

今回の調査では、学生の6割が「地震の揺れを体験するイベントに参加したい」と答えています。次の時代を担う若い世代の関心が高く、喜ばしい結果です。彼らの防災への関心に応えるためにも、啓発や教育にいっそう力を入れるべきですね。

先のとおり、情報だけでは画面の向こうの出来事と捉えてしまいがちです。しかし、リアルな場での「体験」が、防災意識を高め、自分ごと化する大きなフックとなります。そのことは、今まで実施してきた防災キャンプや避難体験などの場で、私自身も実感してきました。親子で防災や災害に関する体験に参加すれば、防災に関する会話を増やすことができます。さらには、もしものときにどんなふうに対応し、安否を確認するべきか、家族で具体的に話し合うきっかけになるでしょう。地震のとき、お子さんが身の安全を確保できないかもしれない、お子さんと無事に合流できないかもしれない…という不安も払拭できるのではないのでしょうか。

関東大震災から100年の今年の「防災の日」、「とりあえず防災」から脱却する機会として、活用してみてください。



**松島康生（まつしまやすお）さん** 災害リスク評価研究所 代表（災害リスクアドバイザー）

国や自治体向け防災コンサルタントのプロデューサーとして地震被害想定調査、ハザードマップ、地域防災計画の業務に携わり、国土交通省や文化庁の防災委員も務めた。2011年、東日本大震災を契機に行政から民間にシフトし「災害リスク評価研究所」を設立。企業や病院、高齢者施設、自治会向けに、地震や風水害が発生した時の災害リスクを詳細に調査して、これに適した対策アドバイスやBCP（事業継続計画）の支援、実践型防災訓練の指導をしている。他に立正大学 外部研究員／日本保健医療大学 非常勤講師など